

## ニュース

### みつばち安定確保支援事業

ミツバチ不足問題への対応策として、農林水産省は本年度の一般補助事業予算「みつばち安定確保支援事業（総額 46,204,874 円）を公募した。2010 年 4 月 1 日に、この事業の実施団体として「みつばち協議会」（事務局、日本養蜂はちみつ協会）が設立され、応募した結果、本事業の採択が決定された。

この事業には全体を統括する事業推進委員会、および具体的な作業を担当する、養蜂家向けマニュアル作成検討委員会、園芸農家向けマニュアル作成検討委員会および、みつばち用新薬検討委員会があり、各委員は、広範な分野から、養蜂家、交配用ミツバチ供給企業、製薬企業、県の関係部局職員などに加え、各自治体試験機関、畜産草地研究所、畜産生物安全科学研究所、名古屋大学、京都産業大学などからの研究者も

参画して構成され、玉川大学からも 3 名が委員参加している。

この 3 作業委員会は、それぞれ、1) 養蜂家向けのミツバチ増殖マニュアルの作成、2) 園芸農家向けのミツバチ利用マニュアルの作成、3) みつばち用動物医薬品の開発登録を目指し、特に (1) および (2) の事業では、今回は東海地方のイチゴ農家および養蜂家が協力して、マニュアルに掲載する事項に関する妥当性の実践検討を行っている。

基本的に単年度の事業ではあるが、問題が重要であること、これまで農林水産省本予算での養蜂関連支援事業がなかったこと、またこのような規模での産官学一体となった体制での試験事業実施は過去に例がなかったことから、今後の継続にも期待が大きい。



園芸農家での試験実施を前に入念に作業内容の確認を行う関係委員



イチゴハウス内の巣箱を遮熱材で包み、温度変化が緩和できるかどうかを確認する



ハウス内の蜂群の状態変化を追跡するため蜂量指標となる巣板上のミツバチの写真撮影を行う



巣箱内の温湿度環境の変化を調べるため、温湿度の長期連続自動記録装置を入れる

## ニュース

### 伊勢丹花々祭チャリティ

2010年2～4月に行われた伊勢丹百貨店花々祭で、全国の関係店舗で集められたチャリティ基金(総額8,446,200円)が玉川大学ミツバチ科学研究センターに寄贈された。これを各地でミツバチのための蜜源花粉源増殖の関連活動に分配し、具体的な活動を進めてもらっている。主な分配先からは今後活動報告が寄せられることになっており、この事業が終了した時点で、各地の活動報告も本誌に掲載して、紹介していきたい。



レンゲをモチーフとした花々祭のディスプレイ  
(伊勢丹新宿店)

### 「ミツバチ科学」は年2回発行に

玉川大学ミツバチ科学研究センターの機関誌として年4回刊行されていた本誌「ミツバチ科学」は、4年に近い休刊を経て今回復刊を果たすことができた。28巻からは年2回の刊行で継続刊行を目指す。刊行回数が減る分、誌面の充実を図って、読者の期待には応えていきたい。なお、刊行途上となっていた27巻は、3・4号を合併号として、本号と同時の刊行とした。次回28巻2号は、今年度末の刊行を予定している。記事内容などにご意見やご要望があれば、ぜひお聞かせ願いたい。

本誌は家畜保健衛生所など関係の公的機関へは寄贈可能であるので、寄贈先として必要などころがあればお知らせいただきたい。

### ミツバチ科学研究センター主任交代

2010年4月より、佐々木正己教授が研究センター主任に就任した。佐々木教授は、2度目の就任で、現在、研究センターの母組織である学術研究所の所長も兼任(農学部教授、脳科学研究所教授も兼務)している。

■編集後記 ■今号(28巻1号)はいくつかの意味で特別なものとなった。まず、2006年に発行された27巻2号の発行以来、諸般の事情で出版が滞っていたが、4年ぶりの再刊に漕ぎ着けたことを喜ぶたい。その間、ミツバチ界においては2つの歴史的ともいえる大きな出来事があった。ひとつはすでに27巻で佐々木哲彦氏による2つの紹介記事が収録されているが、2006年にセイヨウミツバチの全ゲノムが解読されたこと、もうひとつはミツバチ不足の報が先進国を中心に世界を駆け巡り、我が国でも授粉昆虫としてのミツバチの不足は社会問題としての扱いを受けていることである。現に本年も農林水産省が特別の予算措置を行って、対策が進行中(ニュース欄参照)であるが、このようなことは過去に例がない。この話題を扱った単行本も相次いで何冊か出版されている。関連して、国際的な女王蜂の受給体制、農薬、外来の疾病、ダニに対する抵抗性など多くの問題が提起され、図らずもさきごろ名古屋でCOP10(生物多様性条約第10回締約国会議)が開催され、本来、多様な昆虫に頼っていた農作物の授粉が、ミツバチだけに頼らざるを得ない実情・問題点がクローズアップされた形だ。再刊にあたっては、玉川大学の関係者の間で、いっそweb版にしてしまおうかといった議論も出たが、結局ニュース欄にもあるように、年2回の発行と形は変えることにはなったが、少なくとも当面紙媒体での継続を図ることとさせていただいた。表紙の体裁も、変えることも出来たのだが、30年に及ぶ歴史もあり、この点の改案は、今後委ねることにした。今号の内容については、新しい情報を主としつつも、和田依子氏の「養ほう振興法」の記事のおかげで、我が国の養蜂の歴史的な側面に光りを当てることができた。ゲノム解読で研究者層の広がったことでもあり、今後より広い方々にも参画していただき、本誌がその役割を果たしていけるよう育っていくことを願いたい。(佐々木M)